

Journal for Peace and Nuclear Disarmament 創刊号へのメッセージ

田上富久・長崎市長

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)が中心となり、国際学術誌「Journal for Peace and Nuclear Disarmament (『平和と核軍縮』)」を発行されるにあたり、長崎市民を代表してメッセージをお送りいたします。

2012年(平成24年)4月、長崎大学に、核兵器問題に関するシンクタンク機能を備えた情報・政策発信拠点として「長崎大学核兵器廃絶研究センター」(通称:レクナ RECNA)が誕生しました。

私はこの知らせを大きな期待と興奮を持ってお聞きしたことを覚えています。

RECNAが誕生する前の長崎には、核兵器をめぐる世界の動きを逐一分かりやすく発信したり、政策提言をしたりすることができる専門機関はありませんでした。RECNAの誕生は、平和に貢献し、長崎市が目指す将来像である「長崎にしかできない役割を果たし、世界に貢献する『世界都市』」にまた一步近づくとともに、長崎が被爆地としての“使命”を果たすための大きな力になってくれるのではないかと、期待に胸が膨らみました。

誕生から5年が経過した今では、私の予想をはるかに超える活躍をされており、被爆地長崎にとって、なくてはならない存在となっています。

現在の核兵器廃絶に向けた国際情勢を見ますと、今年7月に、被爆者が長年願ってきた「核兵器禁止条約」が国連加盟国の6割を超える賛成を得て採択され、すでに50を超える国々が署名しており、条約の早期発効が期待されています。そして、この禁止条約成立のために大いに尽力した、私たちの仲間である「核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)」がノーベル平和賞を受賞し、市民社会の努力が世界を動かすことを世界に示しました。

こうした嬉しい動きがある一方で、核保有国や核の傘の下にいる国々は核兵器による安全保障の重要性を主張し、禁止条約に反対しています。

核兵器のない世界に進むのか、核兵器の危険に怯えながらも依存する世界のままでいるのか、私たちの未来を決める、重要な岐路に立っています。

このようなタイミングの中、RECNAが中心となり、「核軍縮」を大きな目標に掲げ、核廃絶を目指す世界の研究者が論文を発表する学術誌を発行されるとお聞きし、RECNAが誕生した時の高揚感を思い出しました。

ここ被爆地長崎から、予断を許さない現在の状況に一石を投じ、必ずや核軍縮の進展に寄与されるものと確信しています。

長崎市は、同じ志を持つ仲間の皆様と力を合わせて、世界から核兵器がなくなるその日まで、全力で取り組む覚悟でおりますので、今後ともお力添えをいただきますようよろしくお願いいたします。

最後に、国際学術誌「**Journal for Peace and Nuclear Disarmament** (『平和と核軍縮』)」のご成功と皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念いたします。

2017年12月6日